

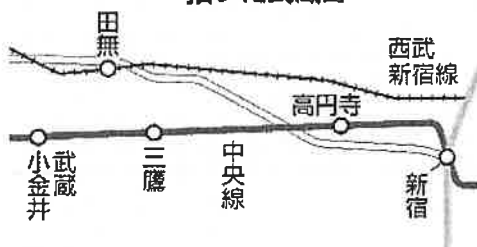
雑木林の地真相暗示

文人の 武蔵野

松本清張(1909~92年)は、1960年度(昭和35年度)に国税局が発表する所得額作家部門で1位になります。62年、同時期に10本以上の連載を抱えながら長篇小説「地の指」(「週刊サンケイ」昭和37年1月8日~12月31日)を完成させます。上京して10年目、52歳という年齢と経済力に応じた東京生活を経験し、同作では東京都の医療行政の闇を対象に「東京」

松本清張 ⑥

松本清張が「地の指」で描いた武蔵野



そのものを相手取ります。当時の都庁はまだ丸の内にあります。銀座の高級クラブの女性と連れだって帰る途中の妙に金回りのよい都庁の男性職員。色男である彼が、

港区で死体と遭遇するところから物語は始まりますが、まもなく舞台の中心は新宿以西の武蔵野へと移行し、繁華街と雑木林という二元的世界によって東京が捉えられます。港区で死体となって発見された都政新聞の記者は、丸の内から三鷹の喫茶店「武蔵野」まで出かけて「武蔵野中」にぼつんと建てられた「病院の看護婦に取材を重ねていたことがわかります。田無周辺に住むその看護婦は、高円寺に家族と暮らす同じ病院の事務長と男女の関係にあります。田無から小金井方面の病院に通う彼女は、タクシー運転手の手で偶発的に扼殺されます。運転手は、都心の繁華街と雑木林の多い青梅街道」とを往來する「無言の観察者」でした。「国分寺に近い雑木林」

で起こったこの事件は、「武蔵野殺人事件」と呼ばれます。「地の指」というタイトルは「土地が暗示する真相を意味している」と清張は記しています。ここでの土地とは、都心との関係性の中で立ち上がる武蔵野を指すと言えます。(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

おすすめの1冊



(光文社文庫)

「地の指」

本書には、国家の中心で公益事業を担う者が交通手段を駆使して水面下で移動し、周縁の共犯者と悪巧みを遂行する様子が描かれています。いかにもありそうな設定なので、実際に起こった事件の真相を追求している気分を味わえます。松本清張は、周縁との関係から中心の闇を見ていました。

武蔵野



武蔵野支局 〒180-0006
武蔵野市中町1の13の1 3F
電話 0422(51)3131
FAX 0422(51)3133
musasino@yomiuri.com
都内版編集室
電話03(3217)1465・1466
江東支局 電話03(3631)6116
立川支局 電話042(523)4477
ホームページ
www.yomiuri.co.jp/local/

購読は 0120-4343-81

【広告】読売Palette 03(6272)9027
【折込チラシ】 0120-03-4343
【読売旅行】 03(5550)0666

10月13日(水曜日)
旧 9月8日<仏滅>

あすの暦

通日 286
月齢 6.7
(正午)



東京標準
満潮 11.54
干潮 3.27
日出 5.45
日入 17.09
月出 13.07
月入 22.46
(小潮)